

て腰を何度も突き出した。けれど、いじってもらえたのは乳首だけ。乳首だけで射精するまで、その実験は続けられた。

「お…っ♡おお…っ♡」

乳首の実験の日のことを思い出していたら、孔内がにゅくにゅくとゼリーをしめつけて止まらなくなってしまった。

がくがくがくッ！！♡♡♡

「おおほお…ッ♡♡♡」

腰が自分のものでないように激しく打ち振られ、その瞬間ぼくは意識を飛ばした。

「ほおおっ♡♡♡♡」

むりゅん——っ♡♡

ゼリーが出口を擦り抜けるあまりの量と勢いに、聞くに耐えない声が喉をつく。もう止まらなかった。

「ほお♡♡おほおおッ♡♡ほおお……ッ♡♡♡」

むりゅ♡むりゅむりゅむりゅむりゅッ♡♡♡♡♡

下腹が少しいきんだだけで、青の半透明のゼリーが、太い一本の柱になって排出される。長々と排出はつづいて、すぐ下の地面に何度も折るかさなりながら、ゼリーの柱は伸びつづける。

「んおお…♡ごめ…っなさ…♡ごめ…なさいい…♡